



## デイリー・ジーザス・ニュース #311

金曜日... 苦悩と贖罪の日

### イエスの三段階のローマ裁判

イエスはローマ総督ピラトのもとへ連れて行かれる

ヨハネ 18.28-32 ( 並行聖書 : マタイ 27.1、マルコ 15.1A、ルカ 23.1 )

=====

28彼らはイエスを縛り、それから全会衆が立ち上がり、カヤパのところからローマ総督の宮殿へ連れて行き、総督ピラトに引き渡した。すでに朝早くだったので、彼らは儀式上の汚れを避けるために宮殿に入らなかった。過越の食事をしたかったからである。

29そこでピラトは彼らのところに出て来て尋ねた。 」あなたたちはこの男に対してどんな罪状で訴えているのか。 」

30彼らは答えた。 」もし彼が犯罪者でなかったら、私たちは彼をあなたに引き渡さなかったでしょう。 」

31ピラトは言った。 」それなら、あなたたち自身で彼を引き取って、あなたたちの法律に従って裁きなさい。 」

」しかし、私たちには誰かを処刑する権利はない「と彼らは反対した。

32これは、イエスが、自分がどのような死を遂げるかについて語っておられたことが成就するためであった。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = <sup>MT</sup>、マーク = <sup>M</sup>、ルカ = <sup>L</sup>、ヨハネ = <sup>J</sup>、使徒行伝 = <sup>A</sup>。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します**。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	プラエトリウム: ローマ総督ポンティウス・ピラトの宮殿
タイムライン	4月上旬 ( 39ヶ月目 )
イエスの生涯の文脈	第8段階：受難週
	E. 金曜日：苦悩と贖罪の日
	イエスの三段階のローマ裁判
タイトル	イエスはローマ総督ピラトのもとへ連れて行かれる

今日の朗読は、イエスのローマ裁判の3つの段階の始まりです。サンヘドリンはイエスをピラトのもとに連れて行き、審理を開始しました。物語はユダヤの指導者たちの皮肉に満ち溢れていますが、イエスの言葉は対照的に高尚です。

サンヘドリンが儀式律法の文面を厳格に守ろうとする姿勢の皮肉さは、ヨハネの物語によって明らかになった。ピラトは異邦人であったため、ユダヤの律法の下では儀式上「汚れた」者とされていた。そのため、指導者たちはピラトの宮殿、つまりプラエトリウムに入りたがらなかった。「汚れた者」とみなされ、その日のうちに神殿で過越のいけにえを捧げることができなくなることを恐れたからだ。彼らの偽善は衝撃的だった。

これらの男たちは、嘘、偽証、虚偽の告発、そしてイエスを十字架につけることで殺人を犯そうとする欲望に何の抵抗も感ぜませんでした。イエスへの復讐のために容認してきた司法手続きの違反についても、何の問題も感じていませんでした。彼らの心は邪悪で、嫉妬と憎しみに満ちていました。しかし、彼らは「汚れた」土地や人々との接触によって自らを「汚す」ことのないよう、律法的な注意を払っていました。

さらに彼らは、イエスをピラトの尋問のために総督官邸に押し込み、「汚れた者」とすることに全く抵抗がなかった。なぜなら、イエスは「犯罪者」であり、そんなことは問題ではなかったからだ。ユダヤ人指導者たちの行動は極めて偽善的で、皮肉な不正義に満ちていた。

ピラトは、これらの人々の動機となっているイエスへの嫉妬と憎しみを見抜いていました。彼は彼らに自らこの事態に対処するよう命じ、一切関わりたくありませんでした。しかし、ユダヤ人の指導者たちは、イエスを十字架につけることを望んでいたため、ピラトが介入しなければならないと主張しました。十字架刑は、彼らが考え得る最も屈辱的で苦痛に満ちた死に方でした。

十字架刑はローマ帝国の特技であり、帝国に反抗した最悪の犯罪者に対してのみ執行されました。ローマの権力と権威に服従しない者を見せしめとするためでした。これは、イエスの裁判におけるローマ時代の多くの事例の最初の例であり、ピラトは自らの信念を貫く者というよりは、ただ人に迎合する者であることを露呈しました。彼は指導者ではなく、政治家でした。

ユダヤ人指導者たちの偽善と皮肉、そしてピラトの弱さと人たらしの態度に反して、ヨハネはこの場面を、イエスの言葉を再び聖書のレベルにまで高めることで締めくくりました。イエスは、自分が「異邦人に引き渡される」、つまりローマ当局によって十字架につけられることを何度も予言していました。

ヨハネがイエスの言葉が成就した際に用いた表現は、旧約聖書が成就した際に彼が何度も用いた表現と同じです。言い換えれば、ヨハネはイエスの言葉が聖書と同様に「神の言葉」とであると見なしていました。なぜなら、イエスは人間の肉体をまとった、生ける永遠の「神の言葉」であったからです。

ユダヤの指導者たちは、ローマ皇帝の全権を握るピラトの命令を拒絶しました。ピラトは彼らにイエスを自ら処分するよう命じましたが、ピラトはそれを拒絶しました。彼らは、イエスを十字架につけようとした時、実際には神の言葉、すなわちイエスご自身を成就していたことに気づいていませんでした。実際、イエスに何が起きているかを完全に掌握していたのはイエスでした。イエスはこう言っていました。

**「わたしは自分の命を捨てます。それは、再びそれを得るためです。だれもわたしから命を奪い取ることはできません。わたしが自ら進んで命を捨てるのです。わたしは命を捨てる権威も、また再びそれを得る権威も持っています。」**（ヨハネ10章17節B-18節）

応用：

イエスがパリサイ人、そして彼らの偽善に対して抱いた大きな問題の一つは、彼らが「**ブヨを濾してラクダを飲み込む**」ことだった。彼らは、自分たちが神に背いている重大な点には全く気づいていなかった一方で、儀式的律法における比較的重要でない些細な点には極めて細心の注意を払っていた。従順に関する彼らの優先順位は正反対だった。今日の朗読箇所は、まさにその典型的な例である。

偽善は私たちの罪深い性質の表れです。私たちは皆、何らかの形で偽善に陥ります。おそらく最も一般的な方法は、「**ブヨを濾してラクダを飲み込む**」ことかもしれません。

私たちは特定の罪を厳しく扱い、他の罪を無視しています。どの教会や宗派にも独自の「最悪の罪」リストがあり、それらはそれぞれ異なります。例えば、私の所属する宗派は長年、酩酊、賭

博、喫煙といった悪徳を強調してきました。問題は、肥満につながる過食や、運動を避ける肉体的な怠惰といった罪については、私たちが沈黙してきたことです。これらもまた、聖霊の神殿である私たちの体に対する罪です。そして、これはほんの始まりに過ぎません。私たちの「罪リスト」は主観的で、選択的で、文化的な影響を受けており、決して完全なものではありません。

罪深さや罪を犯すことに関して、私たちは誰も自分自身を監視することはできません。私たちは自分のブヨやラクダにさえ気づいていません。神の言葉と聖霊なる神だけが、私たちのすべての罪――「大小」を問わず――を解決できます。神だけが、私たちの芽生えつつある偽善を完全に解決できます。私たちはまた、互いに容赦なく正直に説明責任を果たす必要があります。

良い知らせは、神は私たちを清め、完全な者とし、ご自身に似た者とすることを愛しておられるということです。イエスは、祈りに記されたとおり、私たちを完全に聖化するために亡くなりました。イエスと御言葉は、偽善を治す薬です。

あなたが注意を払う「ブヨ」と、飲み込みがちな「ラクダ」とは何ですか？

あなたは自分の盲点を明らかにしてくださるよう神にどれくらい頻繁に祈りますか？

この重要な継続的な祈りの要請の頻度をどうやって増やすのでしょうか？